



「わたしたちは」

ステージの上でそう言いかけて、息をのんだ。

いつも遊び場にしているホールが今は観客席になっていて、びっしり並んだ大人たちの顔が、みんなこっちを向いている。淡いオレンジ色のライトがホール天井からこちらを覗きこむように吊るされていて、鋭い光の矢が目に刺さる。

――ワタシタチハ……？

私はいったい何を言おうとしたのだろう。何のために、ここにいるのだろう。

ライトのまばゆさからもこの場の居心地の悪さからも逃げ出したい気分になって、私は、ぎゅっと目をつぶる。

すると暗闇は私を優しく包むどころか、黒っぽい偽物の闇を背景に紫や真紅の悪趣味なネオンサインを散りばめて幻惑するのだった。

閉じたまぶたに力を込めれば込めるほど、あやしげなネオンサインたちはねじれながら強い光を放ち、やがてそれらは夜毎に私をさいなむ夢の姿を思い起こさせる。



（彼らは何と簡単に感謝や祈りを忘れてしまうのか。私は今日までに何度も猛烈な怒りに身をまかせて怒鳴り散らし暴れ回る夢をみているのだ。その対象は見知らぬ人だったり妙な姿をした生き物だったり夢によってさまざまだが、頭のどこかで私はちゃんと理解している。この怒りは、本当はすべて彼らに向かっている。本当はすべて、彼らの罪なのだ）

小鳩幼稚園の学習発表会において、年長組の出し物といえば「イエス様の誕生」の劇と決まっていた。ある夏の日の朝、お祈りの時間の後で○子先生は言った。

「みなさんの、普段のお話のしかたや遊びかたを見て、先生たちで誰が何の役をやるかを決めました。どれもみんな大事な役です。発表会まで、一生けんめい練習しましょう」

私の役は「星の子1」だった。誇らしく思った。

幕が開く。きらきら輝く金紙で出来た星をひとつずつ戴いて、星の子役の園児たちがステージいっぱい居並んでいる。そのいちばん左端が、私だ。

「わたしたちは……」

私は私のせりふを言う。すると他の星の子たちが、声を揃えてくり返す。

次いで星の子2が話し、3がそれを受け、劇がはじまるのだ。

つまり星の子1は物語をはじめの役、口火を切って凍りついた時間を動かす役、すべてを束ねる役だと言えよう。

なんてすばらしい！ マリア様にも三賢人にも私は羨望を抱かなかった。

先生たちは私の日頃の振る舞いを見て、このすばらしい星の子1が私に似合うと判断してくれた！ そう考えるとうれしさに胸が苦しくなるほどだった。

帰宅して家族にこのことを伝えると、父は言った。

「せりふはそれだけなのか。ちょい役だな」

母は言った。

「マリア様はどこの子がやるの？」



（夢のなかで私の身体は大人と変わらないくらいに成長しており、自分でも信じがたいような腕力を振るうことが出来る。その力にまかせて私は手当たり次第に物を放り投げ、打ちこわし、叩き割る。力が尽きない身体になったのか、そもそもこれが夢だからなのか、暴れても暴れても疲れを感じないし、身体じゅうどこも痛まない。

誰かが隣に近づいて、いかにもおずおずと声をかけてくる。もう暴れるのをやめて、とか、落ち着いて、とか、そういう何の足しにもならないことを言う。その善人ぶった話し方は私をますます苛立たせ、次の暴力へと駆り立てるのだった。

うるさい、うるさい！ 私は叫ぶ。放っておいてよ、どうにも出来ないんだから、黙っていてよ。この怒りを、苛立ちを、くやしさを、理解する気もないくせに、あれこれ言うのはやめてよ。訳知り顔をするのはやめてよ。この悲しみに、触れることも出来ないくせに)

年中組の終わり頃にKくんは幼稚園に来なくなって、年少組だったKくんの妹も来ていなくて、その代わりに、数日経った午後にテレビカメラや三脚を抱えた大人が来た。

彼らは年中組の部屋の奥までどやどやと入ってきて、壁に並んだみんなのかばん置き場の前にカメラをしばらく置いて、何やら納得した様子で去っていった。私たちにこんにちはとも何とも言わなかったことと、上履きもスリッパも履かずに靴下で歩き回っていたことを覚えている。テレビの機材は全体に黒っぽくてごつごつして、虫みたいだった。

今日はテレビカメラが幼稚園に来たよ、と話すと、父に「はしゃぐな。バカかお前は」と言われた。

その他の出来事は正確な順番では思い出すことが出来ないが、記憶している限りのことを並べておこう。

幼稚園で撮影された映像はほんの一瞬しか放送されなかった。かばん置き場に貼られたKくんの名札が大写しになっていた。

その後はどこかのアパートの廊下が延々と映し出され、「某日の未明に、市内に住む女性が自分の子供二人の首を絞めて殺害した」というニュースが読み上げられた。

ニュースを見た母は、「こういうことは誰にでも起こることなのよ」と私に向かってしみじみとした調子で言い、父が帰ってくると同じ話をくり返した。

父は、年中組に進級したときに組の全員で撮った写真を出してきて、Kくんはどれか、と私に尋ねた。

集合写真はホールで撮られていた。小柄なほうだったKくんは前列で椅子に座って、何だか驚いたような顔で写っている。

それを指そうとしたときの私に何が起こったのかを説明するのは難しい。突然、叫びだしたいような気持ちがどこか別の所から心に差し込んで、すぐさまねじれ、自分でも考えもしなかった言葉となって口をついて出てきたのだった。

「ほらこれがKくん。……私と同じでしょう」

両親は何も答えなかった。掛け時計の秒針の音が聞こえるくらい、居間が静かになった。



(そうかと思えば、夕暮れの風のなかに一人で立ち尽くして、何事かをじっと考えている夢もしばしばみている。頭のなかははっきりしていて、気持ちは穏やかだ。右手の指の間にはタバコが挟まれていて、冷たい風に吹かれては細い煙がリボンのようにたなびいて消えてゆく。生まれて育った家庭から遠く遠く逃げ去って、いろいろな人を失望させ落胆させ、そんな奴だと思わなかったよとため息をつかせた末.....私はあの怒りから自由になっていた。

毎日の生活に追われて慌しく、頼る相手もないから心細い思いをすることも多い。それに手足も服も薄汚れて、伸び放題の髪の毛をひつつめて、まるで女らしくなかった。何もかもが、思い描いていた自分とはかけ離れている気がする。本当にこれでいいのかな？ と首をかしげてみた

。

すると、これでいい。否、これがいいんだ！ という力強い声が、自分自身の心の中から沸きあがってきて、私は面食らう。これがいいんだ。子供の頃には、こういう生き方があることさえも知らなかった、知ることを許されていなかった。今は知っているから、それを選んでもいいんだ。忙しくても寂しくても、もう過去を思って頭を掻きむしったり怒鳴り散らしたりしなくていいんだ。私は、自由になった。生き延びた。

そう生き延びた。ごめんなさい。私ひとり、生き延びて。.....不意にあふれ出した熱い涙も、たちまち強まった風に飛ばされてゆく。秋の始めの虫がそここの藪で鳴いて、辺りは優しい夕闇に包まれはじめたところだ)

「ああ、未来を変えたい」

未就学児がそんなことを呟いていたらおかしいだろうか。おやつ前の自由遊びの時間、私はホールの隅っこで古いアップライトピアノに寄りかかって無気力に座り込んでいるのがお決まりだった。ただ座っていると先生に心配されるので、いつも本を抱えておくことにしている。そして、こっそりと、じゅくりと、絶望に身を浸すのだった。

特別ミサが開かれたのは、Kくんが登園しなくなってからの一連の出来事から少し経ってからだったと思う。おそらく園長先生の都合だろう。彼は他県に住んでいて、教会の仕事などで何かと忙しいのだと聞いたことがある。

いつもポロシャツか何かを着ていて、にこにこ柔らかな印象の園長先生が、ミサでは黒い衣装に十字架を下げた恰好で、終始沈んだ表情だった。手には分厚い聖書があった。

「神様は、いつもあなた方のひとりひとりを見ておいでです」

そんな話を聞いて、それからみんなでお祈りをした。

園長先生は、Kくんとその妹の魂が神様の所へ行けるようにお祈りしたのだろうか？ と、後になってから私は考えるのだった。

私自身は、そんなふうには祈らなかった。神様の居場所なんて知らないし、KくんがKくんのお母さんにくびり殺されたという事実や似たような事態が私の家庭にも起こりうるという考え方が祈りによってどうにかなるとは思えなかったからだ。

お祈りの代わりに、私は念じ、問いかけていた。神様、本当に私たちを見ているんですか？ Kくんが首を絞められるのも見ていましたか。私にはどんな未来がありますか。暴れたり誰かを傷つけたりしてばかりの人になったら、きっと神様は怒るでしょう。

でもそんな未来しか私には残っていないような気がするのです。

神様。ねえ、神様。本当に見えていますか？



（一方の夢で私はどす黒い怒りに飲み込まれて我を忘れている。もう一方では自由だが一人きりであくせく生活している。二つの夢が重なり合って、ようやく、幼い私の閉ざされた世界を変えることができるのではないだろうか。

今、埃まみれの手足を洗って、日々の暮らしに追われているほうの私が、狭いベッドにもぐり込む。そして.....夢をみる。夢のなかで夢をみるのだ。

夢のなかの夢では私が怒り狂っている。周りのどんな呼びかけも、その狂躁を鎮められない。止められるのは、私自身のみなのだ。

私は私の肩を抱きかかえてやるだろう。その怒り、その悲しみは、私のものだ。そう宣言するだろう。けれども、ほら見て。怒りを遠くへ追いやって、自由になれるんだよ。大変なこともあるけど、いつでも自分自身でいられる。一日のすべてを自分の考えで選んで、働いて、そうして夕暮れの風のなかで吸うタバコは格別な味がする。そうやって生き延びることが、私にも出来るんだよ。

それを聞いて怒れる方の私は、やっとな暴れるのをやめるだろう。そして真っ黒で平らかな影に姿を変えて、自由なほうの私の一部になる。怒りを追いやるのではなく根本から許す日まで、影が消えることはないだろう。けれどもそれにはもっともっと時間がかかるし、別に消えなくても構わないと思う)

（それよりも今は学習発表会に戻らなければ。星の子がステージで待っている)

——ワタシタチハ……？

ぎゅっとつぶっていた目を開くと、スポットライトがさっきにも増してまぶしく、痛みを感じるほどだった。

ステージのあちこちから、金紙のぶつかり合う音や衣装の生地のかすれ合う音が聞こえてきた。せりふに間が空いたので他の子たちが動揺しはじめたのだ。

わたしたちは、一体何だというのだろうか？

不意に、昨日のリハーサルの後で○子先生が泣いていたことを思い出した。他の先生が「Kくんのことは……」と声をかけていた。Kくんがいたら、何の役をもらっていただろうか？

ああ、もう、何も言いたくない。

ここから逃げ出したい。

(物語を始め、凍りついた時間を動かし、すべてを束ねるのよ)

ささやくような、しかし力のこもった声が心のなかで響いたのは、この時だった。

(大丈夫、私は星の子1。私はわたし。思い出して)

そうだった。

今や何もかも思い出した私は、隣の子がぎょっとするくらいの音を立てて、大きく、息を吸い込んだ。

そして、声を放つ。

「わたしたちは……、お空に輝く、星の子どもたちです！」

「星の子どもたちです！」

唱和が続いた。

一瞬の間……そして拍手。

小鳩幼稚園のホールが揺れるような、いっぱい拍手と共に、劇がはじまった。

切り